連載　海外提携研究機関紹介①

中国・浙江工商大学―筆談の研究―『大河内文書』を中心に

王宝平（浙江工商大学教授）

浙江工商大学―筆談研究

当大学の日本研究は、主要なメンバーが浙江大学日本文化研究所から移籍したこともあり、従来の伝統をそのまま継承する形で、中日文化交流に最も力を注いでいる。1990年代、関西大学の大庭脩先生を始めとする東西学術研究所員との交流の中で江戸時代の漂流民の史料に出会い、その中に筆談の記録が多数含まれていることをその時に初めて知った。

しかし、それを漢字文化圏独特の文献ジャンルとして認識し、中日文化交流史研究の新資料として利用すべく本格的な研究がスタートしたのは、浙江工商大学に移ってからのことである。

これまでの活動内容

本研究の主要メンバーとして、王勇、王宝平、張新朋、姚琼などが挙げられるが、その他に学外の研究者も多数招聘して、共同研究を進めている。近年、主に次のようなことを行った。

①中国の科研の申請

下記の筆談に関する研究・出版助成を申請した。

ア．教育部研究プロジェクト「日本藏晩清中日筆談史料集録与研究」、代表者：王宝平

イ．「十二五」国家重点図書出版企画プロジェクト、代表者：王宝平

ウ．国家出版基金助成プロジェクト、代表者：王宝平

エ．国家社会科学基金重大プロジェクト「東亜筆談文献整理与研究」、代表者：王勇

②読書会の発足

東亜研究院で2015年3月より「東亞筆談読書会」を組織して、週に一度国内外の研究者が基礎史料を読み、研究発表を行っている。今年5月現在、延べ44回に及んでいる。

③研究成果の公刊

王宝平：日藏黎庶昌与宮島誠一郎筆談記録、『文献』2014年11月

張新朋：内藤湖南与羅振玉第二次筆談之研究、『文献』2016年11月

王勇編：東亜的筆談研究、浙江工商大学出版社、2015年

王宝平編：日本藏晩清中日朝筆談資料―大河内文書、（8冊、カラー印刷）浙江古籍出版社、2016年

日本藏晩清中日朝筆談資料―『大河内文書』について

『大河内文書』とは高崎藩最後の藩主・大河内輝声（おおこうちてるな）（1848～1882）が遺した、明治前期に中日韓文化人同士が漢文で行った筆談集のことである。その内容は政治、歴史、文学、地理から芸術、風俗、習慣にまで及び明治前期の中日友好の有り様を探る上で好個の資料といえる。

図1　早稲田大学図書館蔵『大河内文書』

もとは100巻あったといわれ、大河内家の菩提寺・埼玉県新座市にある平林寺が管理していたが、そのうち51巻が大東文化大学に移管となり、残りは早稲田大学（16巻）と高崎市の頼政神社（6巻）に保管されている。

本書は解題をつけて、『大河内文書』佚存一覧表、各筆談者・期日・場所を記した細目、筆談者略伝・索引を付録として、影印出版したものである。他の筆談記録と比較して下記の特徴が挙げられよう。

特徴①

巻数の多さ。『羅源帖』（16巻）、『丁丑筆話』（7巻）、『戊寅筆話』（25巻）、『己卯筆話』（2巻）、『庚辰筆話』（9巻）、『桒園筆話』（17巻）、『韓人筆話』（1巻）、『書畫筆話』（1巻）から成り、3714ページにわたる、現存する多数の筆談記録の中で最大規模の史料を誇る。

図2　大東文化大学図書館蔵『大河内文書・戊寅筆話』

図3　頼政神社蔵『大河内文書・丁丑筆話』高崎市指定重要文化財

特徴②

筆談の時間が長く、頻度が高いこと。明治８年（1875）９月３日から同 14 年(1881)10 月 13 日まで、６年余にわたり 667 回の筆談が行われた。特に、大河内輝声と在日中国民間人・羅雪谷や王治本などとの交遊は日常的に行われ(今でいうスマートフォンでの交流のように)、当時の中日文化人の交遊の足跡を克明に記している。

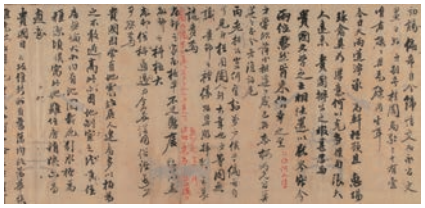

図４
大河内輝声が初代公使・何如璋を初めて訪ねた際の筆談（p1351）

図５
大河内輝声と羅雪谷がトイレをめぐる筆談（p406）

図６
大河内輝声と羅雪谷との筆談に描かれた上海画(p365)

図７
羅雪谷が大河内輝声に中国の象棋（将棋）を紹介する（p135）

特徴③

参加者の多さ。６年余の交流の中で、中国人 58 人、日本人 69 人、朝鮮人５人、合わせて 132 人が筆談に加わった。中国人では日本駐在の外交官や来日した民間文化人以外に、外交官の家族や親類も多数参加した。彼らは正規の外交官ではないため、他の史料には殆ど記載されていない。そのうち、何如璋の次子・何其毅、何其毅の家庭教師・梁詩五、黄遵憲の弟・黄幼達、および従兄弟・黄鈞選は、その後日本や米国に駐在する外交官となった。この日本滞在の経験は後年の彼らの活動に少なからぬ影響を与えたと考えられる。

また、日本人では漢学者の他、江戸時代の旧臣も多数参加した。下總国佐倉藩（現、千葉県佐倉市）、同結城藩（現、茨城県結城市）、越前国福井藩（現、福井県）、同勝山藩（現、福井県勝山市）、駿河国田中藩（現、静岡県藤枝市）、伊勢国津藩（現、三重県津市）、上野国高崎藩（現、群馬県高崎市）といった藩主が列挙される。公職を剥奪された彼らは、筆談中時々明治政府に対して愚痴をこぼした。それが中国の外交官の明治維新に対する正確な判断に直接的間接的な影響を及ぼしたはずである。

以上で分かった研究上の意味

①筆談は「筆話」ともいわれ、書写を通じての談話なので、「書き」と「話し」の両方の要素が含まれる。『漢語大詞典』で「筆談」という項目につき「謂書面談話」（書面談話を謂う）と定義づけるのはそのためである。しかし、両方は五分五分の構成ではなく、「筆」は「談」の修飾語で、あくまでも談話という目的を達成するための手段に過ぎないので、中心になるのは「談話」である。

②談話が中心である以上は、普段の談話記録と大差がなく、その場で思ったこと、言おうとしたことをそのまま記録し、中には「雅」の内容もあれば、「俗」の内容も多数含まれ、いわば玉石混淆である。『大河内文書』に限っていえば、学問を語る真面目な内容が記されている以外、好色の話も思う存分に交流されていたことがわかる。一方で近頃の人間は「化粧された」詩文集に慣れ切ってしまっている。例えば「維新派」の代表格である黄遵憲が書いた筆談について、後世の人間はその内容が政治や維新、または改革について多く書かれていることを期待していたが、実際のところ、「好色」と女遊びに関する話題が多いので、その落差にがっかりしてしまった。そのことについては、すでに先行研究で指摘している通りである。(汪向栄「一部中日文化交流史的宝貴資料」、『鄭子瑜的学術研究和学術工作』所収、復旦大学出版社、1992 年)。精選された詩文集と異なり、等身大の史実が現れ、ナマの人物が自分の呼吸を以て登場するのが筆談という記録の最大の特徴かもしれない。

③筆談は言葉が通じない時にこそ行われるものだが、東京の公使館には正式の通訳がいたにもかかわらず、筆談が中日文化人の間で流行っていたのはなぜであろうか。

漢字は「感字」で、書を鑑賞し、目を楽しませ、教養を高める文字でもある。通訳された口頭語ではそれが機能しないし、後世に残すこともできない。漢字の発祥地から来た人への尊敬の念を抱いて、幾世代も恩恵を受けた中国文化への憧憬を持って、筆談という形式の交流が明治前期に流行りだしたのである。そして、それが日清戦争の砲声に伴い、姿を消してしまった。浙江工商大学では引き続き『大河内文書』をめぐる研究を継続しながら、「宮島誠一郎文書」に含まれる筆談の記録を整理出版する計画である。